

<<東北魂>>を鼓舞する
電子新聞

発行所 株式会社遊無有

〒207-0005
東京都東大和市高木3-315-1-2-2
http://www.yumuyu.com/
e-mail:yumuyu@wj8.so-net.ne.jp

東北復興

Rising up, TOHOKU!

無料

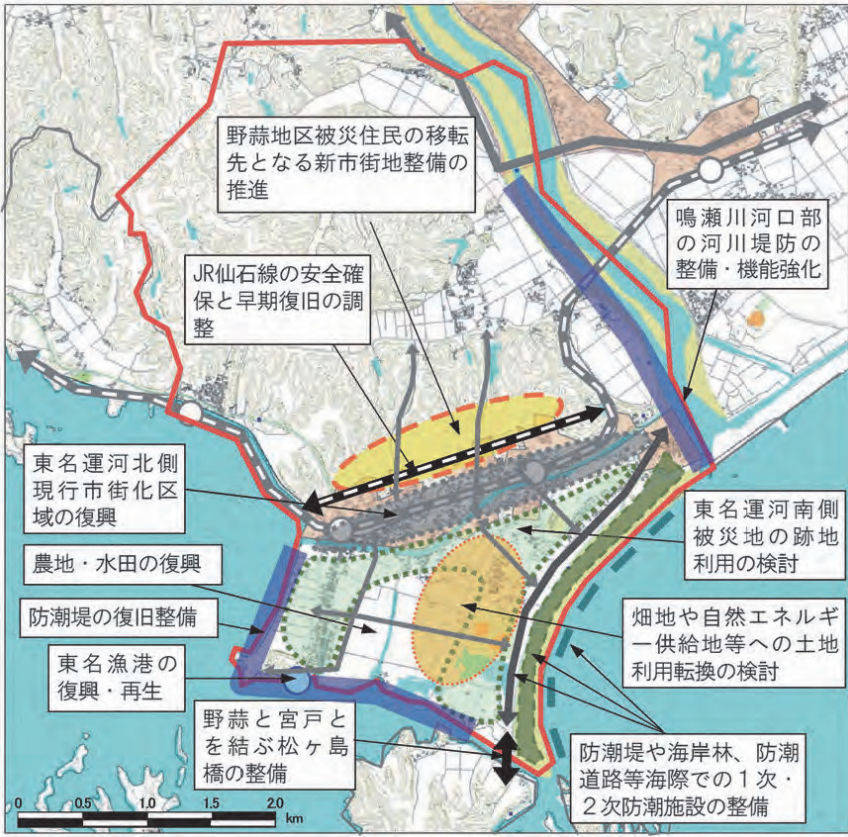
第30号

毎月発行

創刊2014年(平成26年)11月16日 日曜日

2014年(平成26年)11月16日 日曜日

[野蒜地域の復興方針図]



東松島市 復興まちづくり計画(平成23年12月26日策定)より

里浜貝塚の縄文人が 今般の大津波対策を笑う

防潮堤は奥松島の景観を破壊し、 他方で自然の驚異を軽んじている いまから五千年前に出来た松島は 数々の自然災害をくぐりぬけている 縄文人の知恵と過去に学ぶべし!

奥松島、東松島訪問

筆者は、奇跡的に被害の少なかった松島地区には昨年三月に行っていた(『東北復興 第十一号』参照)が、被害の大きかった東松島地区には行っておらず、いつかその被災状況と復興状況を確認しに行きたいとかねがね思っていた。

そうしたところ、奥松島の縄文村のことを知り、大震災と縄文という二つの接点が見える場所として今回訪問することにした。これはそのレポートである。

五千年前に出来た松島

日本三景のひとつである松島には二百六十余りの島々があるが、現在のよ

うな多島海になったのは、二万年から三万年前の氷河期以降に発生した地殻変動での一部沈下と、気候温暖化に伴う海面の上昇によるもので、五千年くらい前と考えられているようである。あるいは七千年前という説もある。いずれにしてもはるか昔の縄文時代のことである。

また、松島湾の沿岸部には、およそ八千年前から人が住んでいたようで、あちらこちらに貝塚などがたくさんある。それも時代によって何度も移動していた。

この五千年間以上とも八千年間以上とも言われる期間中に、東北大震災と同程度か、あるいはもっと規模の大きな津波に何度見舞われたことだろう。

歴史的に発生が明らかでない津波は今般の大震災関連でその規模が明らかになりつつあるが、そのクラスの津波に何度も襲われたことであろう。

あらためて、そうした多くの自然災害があつて、いまの松島の姿があるのだと思うのだ。

中途半端な高さの防潮堤は必要か?

奥松島への行き帰りに、野蒜(のびる)海岸脇の道路を車で走った。その周囲にはかさ上げした土地が、次々に林立し、あるいは細長く横たわり、そびえ立っていた。その様子はまるで人工のミニピラミッドであ



人工ミニピラミッドのような土地かさ上げが景観を破壊する

り、土で出来た万里の長城のミニチュア版であった。巨大な津波の記憶が生々しい状況のなかで、何かに守りたいという気持ちは分らないではない。しかし、岩手県田老町の防潮堤のことがあつた。

田老町は、リアス式海岸の湾の奥に位置し、幾度も津波の被害を受けているため、総延長二・五キロにも及ぶ高さ十メートルの防潮堤を建設するなど、津波に対して強い街づくりを進め、日本にある「万里の長城」とまで言われて、国内外から絶賛されていた。建設には四十五年を要して完成させ、町自慢の防潮堤だった。

トで作られ、簡単に壊れるとはとても思えなかった。そこで住民は、建設を終えた一九九六年から安心して家を建て続けてきた。防潮堤は車から見上げるほどの高さにあつた。当初七メートルだった防潮堤が十メートルにかき上げされたが、結果的に強度は失われた。そして周知のように、今般の津波であつてなく破壊され、安心しきっていた住民に大きな被害をもたらしたのである。

こうした例があるのに、高さ七メートルあまりの防潮堤の意味とは何だろうか。またこの防潮堤ですっかり松島の景観・美観が失われる意味は何だろうと考え込



防潮堤の想定の高さと走る車の比較

津波対策は愚策

いったいこの奥松島の津波対策は何を意図しているのであろう。意味がよく飲み込めない。

巨大津波は防げないし、第一、松島観光の目玉である景観を大いに損なう防潮堤とかき上げた土地。松島は観光を捨てる気なのであろうか。

それにしても中途半端な高さの防潮堤で観光資源の魅力が減殺する選択とは何だろうか。

帰る途中、その選択の理由が理解できずに、車を止め、そして引き返し、防潮堤の高さを示す標識とかき上げたミニピラミッド

生活再建ではないのか

震災から三年半以上経過した現在、もつとも必要なのは地元の経済を立て直すことである。被災者の家計の再建は急務である。

防潮堤建設や大仰な土地のかさ上げが優先順位のトップではないような気がするのだ。

松島といえば観光だが、このままでは、日本三景は返上することになりかねないと思つた。

里浜貝塚散策と東北大震災

縄文人は高度に洗練された文化人だった
われわれは縄文人に何を学ぶべきか
数千年の定住期間中に何度も貝塚の位置
を変えていた



縄文数千年間に貝塚の場所を変えている、それは堆積物が増えたためだけだったのか



奥松島縄文村

縄文文化集積の松島

筆者は最近、縄文に惹かれていた。縄文の文化、歴史、土器、土偶、世界観など、縄文と名のつくものすべてに惹かれていた。

東北の歴史を、近世から中世へ、古代へ、そしてさらに遡っていった先の先に縄文があったからである。いわば東北ルーツさの結核である。そこから東北の歴史を再構築し、東北の活性化を模索したいという夢に取り付かれていた。それで最近あちこちの縄文遺跡めぐりをしている。

そんなことで、以前から訪問したいと思っていた奥松島の縄文村を訪ねた。

この地域一帯には、八千年前から人が住んでいたがここに定住した理由は海の産物も山の産物も入手できることではなかったか。

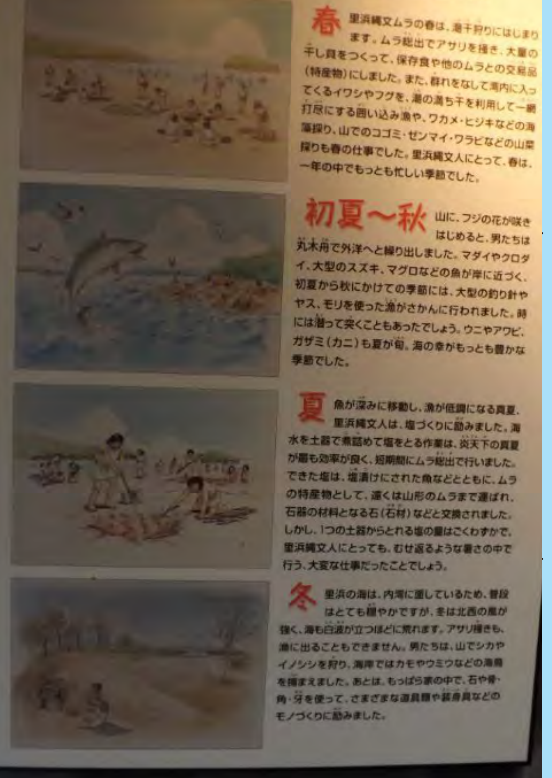
縄文人は現代人と同じ

縄文人を知れば知るほど、現代人の自分との距離が縮んでいくのを感じる。

よく誤解されるが、縄文人は毛皮のパンツをはいた未開人ではない。われわれと同じ人間である。加えて縄文人が狩猟と採集の移動生活をしていただけの子供のときからの教育で習ったが、すでに定住していた。

食生活も現代の日本人と大した違いはない。写真にあるように、食べるものも変わらないし、さまざま

里浜縄文人の四季の暮らし



里浜貝塚について

この奥松島縄文村の里浜貝塚は最も古いのが五千年から六千年前のものであり、一番新しいのは二千年から三千年前のものである。実に三千年から四千年の間使われていたことになる。

しかも時代とともに場所を移している。

場所を移した理由はさまざまと言われているが、筆者としては、縄文海進や自然災害などの自然環境の変化に対応して移したものだと思われる。けっしてゴミ捨て場としての貝塚にゴミがあふれたために移したわけではないと思う。

貝塚はゴミ捨て場ではない

それに、貝塚はゴミ捨て場ではない。ゴミ捨て場に人間を埋葬するはずがない。貝塚は、すべてのものの墓場であり、供養と再生を



5000年～6000年前の貝塚跡から湾を見下ろす、縄文人が見たまんまの海に現代人は護岸工事を施す

自然とともに暮らす

縄文人は計り知れない自然の驚異も恵みも知り尽くしていたと思う。人間と自然との共存という、人間を願う場であった。そこから縄文人の世界観が浮かび上がってくる。食生活も、文化も、あらゆる縄文が立ち上がってくる。

願う場であった。自然と同レベルで考える発想はなく、あくまで畏怖と感謝の対象であった。したがって、どんな護岸工事もしなかったであろう。自然の力を痛いほど理解していたから、自然に対抗し、自然を制御しようとは思わなかっただろう。

江戸、明治時代と比べても大した違いのない生活



ゴミ捨て場の貝塚に人を埋葬したのではない、また貝塚はゴミ捨て場ではない



縄文人はマグロもタイもフグもサメもカキもアシカもウミガメも食べていた

「オラ東京さいぐだ」
in 渋谷くみんフェスティバル
宮城石巻・大室南部神楽
渋谷くみんの広場 (11/2)

十一月二日、三日と、「しづや二〇一四フェスティバル」が開催された。そのなかで、東日本大震災被災地復興支援プログラムとして東北から伝統芸能三団体が招待された。
当新聞でも、その奇跡の復活を取り上げた「大室南部神楽」(宮城・石巻)も招待されたので、関係者に会いに出かけた。
ほかにも初めて見る岩手・二戸の「ナニヤトヤラ」という盆踊り、三人で舞う福島・相馬市の「獅子神楽」も登場した。
二日の演目は「五条の橋」で、牛若丸は筆者の同窓の後輩・佐藤寛君が演じた。感無量であった。
「大室南部神楽」関係者には、若手の佐藤満利氏と長老の佐藤清吾氏にお会いすることが出来た。
清吾氏のコメントが今後の復興への決意を語っている。「生業の復活と共に伝統文化の継承にも力を注ぎバランスの取れた復活を目指して行く」と。復興にとって伝統芸能の力は大きい。



獅子神楽 相馬市



佐藤清吾さま



牛若丸と弁慶



ナニヤトヤラ盆踊り 岩手二戸



弁慶



牛若丸



ほぐして塩水で洗ったいくら



調味料を入れる前



いくら丼もいい！

水産業再興のための料理レシピ紹介

第三回目

正月料理にも最高

【手作りの鮭イクラ】と【いくら丼】



郷土料理愛好家
松本由美子氏

第三回目料理のレシピ

正月料理にも最高！

日本酒の肴にも最高！

【手作り鮭イクラ】の作り方

【材料】

- 生いくら 1キロ
- しょうゆ 1合
- 酒 1/2合
- (アルコールをとぼす)
- みりん 1/4合

【作り方】

- ① いくらをほぐして、必ず塩水であらいます。何回か薄皮などを除いて水をとり替えてきれいにします。
- ② 上記の調味料をいくらに入れます。
- ③ 一晩ねかせたら、食べれます。2日ぐらいいがもつとも美味しいようです。10日ぐらいいは、日持ちします。



生いkraの完成です！

ます。簡単にできますので手づくりの深みのある味をご堪能下さい。冷凍保存も出来ますので、お正月などにも利用されるとよいでしょう。

*これから日本酒のおいしい季節です。【手作り鮭イクラ】を日本酒のお供にしてもいいですね。
*あるいは生いくらたっぷりの【いくら丼】でいただきます。



参加者の面々



三陸海産物の刺身

三陸酒海鮮会・日本橋
 (10/30) 大盛況
 満席21名ご参加で
 被災地・大槌情報共有
 次回の渋谷11/15開催予定

三陸酒海鮮会・日本橋開
 催は十月三十日に、日本橋
 水天宮前にある会場の「さ
 さや」さんで、第八回目を
 開催しました。
 今回も定員二十名のとこ
 ろ、二十一名の参加で、店
 内はすし詰め状態でした。
 復興支援に対する関心が高
 い多くの参加者を集まっ
 いただき、主催側としても
 うれしい限りです。
 開催にあたり、筆者が先
 月訪問した岩手・大槌の状

況もお話ししました。
 かさ上げ用土砂運搬のダ
 ンプはものすごい数でした
 が、岸壁近くはあの震災発
 生直後のままであること、
 また被災者の家計が苦しく
 なっているのを、ますます
 支援が必要であることをお
 話ししました。
 ついでに、筆者が大槌復
 興食堂に関するNHKの番
 組冒頭に後ろ姿で出演した
 件もお話ししましたが、後
 ら姿というところが受けた

ようでした。
 オーナーからは、特に福
 島産の地酒をラインアップ
 に加えたことが案内されま
 したが、いち早く飲ん平た
 ちの胃袋に吸い込まれて行
 きました。
 宮城、岩手、青森の地酒
 も支援が必要ですが、もっ
 と必要なのは福島の地酒で
 す。この点で、もっと福島
 産の地酒をいただくと思
 った次第でした。



東北の地酒ラインナップ



国主館復元図



発掘現場は復興道路建設地

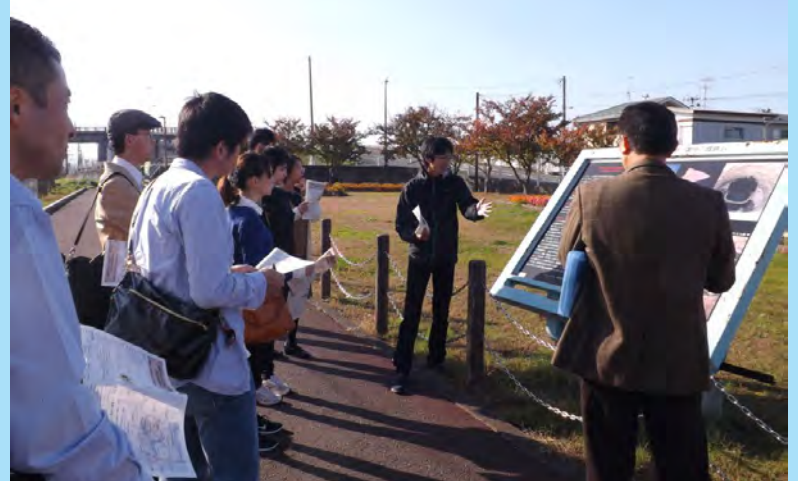
前編で山王遺跡が古代東
 北でどんな役割を持ってい
 たか、また政権と東北蝦夷
 との攻防が非常に厳しかっ
 たことが明らかになった。
 十月二十五日、総勢十一名
 参加の後編ではそれを実地
 で確認することとなった。
 見学開始で見たのは陸前
 山王駅すぐ近くの「国主館

復元図。多賀城政庁から
 かなり離れた場所にある
 「国主館」の館の復元想像
 図であり、山王遺跡に大和
 政権から重要人物が派遣さ
 れていたことの証である。
 その後、今回の発掘の引
 金となった復興道路の工事
 現場を見た。すでに遺跡は
 埋め戻されていた。

多賀城政庁まで歩いたが、
 山王遺跡側から多賀城政庁
 へ辿ると結構な行程であ
 り、山王遺跡の広大さ、こ
 の地域の広大さが実感でき
 る。また、政庁南門から政
 庁への上り坂のアプローチ
 も三百五十メートルもある。
 近辺に未発掘の場所があ
 るとのことだが、お金も労

第六回 とにかく東北を語る会

9/21の「山王遺跡の話」はついに発掘現場
 まで乗りだしての後編へとつながった。10/25、
 陸前山王駅から多賀城までの遺跡めぐりは、
 古代東北における大和政権とエミシの緊張関
 係を現代に蘇らせた。



山王遺跡見学開始の説明

力も必要であり、大規模公
 共工事等がなければ大分先
 になるだろうと感じた。
 政庁は幾度も再建された
 が、七百八十年の伊治皆麻
 呂による焼き討ち後の再建
 が史実として掲載されてい
 た。歴史小説のなかの推理
 ではなく、史実であること
 が分かって妙に納得した。
 それだけ東北エミシとの勢
 力が拮抗していた証である。
 東北縄文遺跡も今後大い
 に発掘される可能性がある
 が、同じ運命を辿らせるわ
 けにはいかならないと思っ



多賀城は伊治皆麻呂による焼き討ち
 後に再建されている



多賀城南門から政庁まで350メ
 ートルもあった

第7回 とにかく東北を語る会 【中鉢美術館で鉄と日本刀の ルーツを考える】

日時 2014年11月29日(土) 13:30から16:30
場所 集合場所: 中鉢美術館(JR陸羽東線有備館駅近く)
 〒989-6433
 宮城県大崎市岩出山字上川原町7番地6
 見学場所: 中鉢美術館(有備館駅徒歩1分)
講師 中鉢美術館 館長 中鉢弘氏
内容 鉄の伝来ルートと日本刀のルーツを考えて
 みたいと思います。鉄は朝鮮半島経由で西
 日本ルートしかないと言われていた
 本当でしょうか? 他には本当になかったの
 でしょうか? また、日本刀のルーツが東北
 にあると言ったら驚かれるでしょうか? そ
 うしたテーマについて学習する機会にし
 たいと思います。

地域共通の課題解決に 県境を越えた取り組みを

東北7県医療連携実務者協議会が開催

今回で第6回を迎える東北7県医療連携実務者協議会が11月1日、新潟市内で開催され、東北6県と新潟その他の地域からおよそ200人の医療関係者が参加した。

一昔前、「総合病院」と言えば、外来受診、そして入院から退院まで一つの病院で済ませられる、いわば百貨店のような存在であった。しかし、高齢化が進み医療費が高騰し、効率的な医療が求められる中で、医療機関間の役割分担が求められるようになり、急性期医療を担う病院、回復期医療を担う病院、長期療養を担う病院など、病院の機能が分化するようになった。そうすると当然ながら、治療も一つの病院では完結せず、別の病院に転院して治療を続けるというケー

スが多くなる。また、地域の診療所を受診した患者が、基幹病院に紹介されてくることもある。こうした際に、病院間ないし病院と診療所との間で連絡を密にし、患者やその家族に不利益が生じないように調整をする対外的な窓口が多くなる病院で設置されることとなった。それが地域連携室(または地域医療連携室)である。地域連携室は、患者の入院や退院に際して必要な手続きなどを一手に引き受ける部署である。その連携室で実際に連携業務を担当する職員が連携実務者、連携担当者などと呼ばれる。

連携業務は、お互い見ず知らずの連携実務者同士よりも、顔も名前も分かる連携実務者同士の方が円滑に進むことが多いので、各病院の連携実務者は他の病院を訪問して関係づくりをしたりする他、地域で連携実務者同士が集まって顔を合わせる会を立ち上げるなどして、「顔の見える」連携を進めるべく工夫をしている。

連携実務者が集まって顔を合わせる会は、地域によって名称が異なるが、概ね連携実務者協議会、連携実務者ネットワークなどと称される。それらは概ね2次医療圏という、医療がその中で完結するよう線引きされた範囲内で集まることが多い。また、それら2次医療圏毎の連携実務者協議会が一堂に会する、都道府県単位の連携実務者協議会が

つられていくこともある。さらに、それらとは別に年に1回、全国の連携実務者が集まる「全国連携室ネットワーク連絡会」という集まりもあり、地域を超えた情報交換の場として機能している。

今回の東北7県医療連携実務者協議会は、二次医療圏の会でも、都道府県の会でも、全国の会でもない。都道府県の県境を越えた地方の集まりである。東北には共通する課題も多い。医療について言えば、特に医師不足、看護師不足、病床(特に回復期病床や療養病床)不足などがそうである。こうした課題に対する取り組みについて情報交換や情報共有を図るのである

ば、必ずしも都道府県単位にこだわらず、地域一体となってより幅広い情報を集めた方がお互いにとって有益なのではという声も聞かれる。そうした趣旨から、全国で初めて都道府県を超えた連携実務者の集まりとして結成されたのがこの、東北6県に新潟を加えた7県の連携実務者でつくる東北7県医療連携実務者協議会である。5年前に第1回の集まりを仙台市内で開催し、以降、盛岡、青森、秋田、山形と進んで今年が新潟、来年は福島で開催される予定である。

共通の課題解決に東北の英知の結集を

さて、東北7県医療連携実務者協議会のことを紹介してきたが、何が言いたいのかと言うと、東北6県ないし新潟を含めた7県で共同して取り組んでいけることは医療以外にもきつと少なからずあるに違いないということである。

周知の通り、残念ながら今の状況、行政レベルではこれらの県が県境を越えて協同して共通の課題の解決に向けて取り組んでいける状況とは程遠い。青森、岩手、秋田の3県はかつて、将来的な合併をも視野に入れた取り組みを行っていたが、今は昔の話となつてしまった。

その一方で、明らかにこの地域に共通する課題は存在するわけで、そのうちの

一つが医療や介護の問題なのであるが、もちろんそれ以外にもたくさんテーマがありそうである。今まさに関連法案が国会で審議されている「地域創生」もそうである。

政府が重要課題と掲げる地方創生に、当の地方はどう関わっていくか、いやどう話ではなく、いかに主体的に取り組んでいくかを考える必要がある。既に全国知事会は「地方創生のための提言」地方を変える・日本が変わる」を公表しているが、もとより地域創生は全国一律に進むものではない。それぞれの地域でその実情に応じてどうするかを考えていかなければならないが、そこでも本来ならば地域的に近い東北6県ないし新潟を加えた7県で英知を結集するというアプローチがあつてしかるべきだと思ふのである。

地域創生のみならず地域の様々な課題について、その解決に向けた知恵を絞るのであれば、より多くの関係者が一堂に会して情報交換した方が得策である。そのためにも、自治体同士のコラボレーションの進展を待つのでなくして、各分野で進められるところから進めていく姿勢が必要と強く感じる。いわばトップダウンを待つのではなく、ボトムアップを積み重ねていくことがより重要なのであると思ふのである。

6県ないし7県をひとまとめにするのは並大抵のことではない、と思う向きもあるに違いない。確かに東北全域は広い。新潟を加えればさらにである。しかし、先に紹介した東北7県医療連携実務者協議会も、最初はたった1人の連携実務者の「同じ東北同士で交流をしていろいろな話を一緒に課題解決に取り組んでいけるような場があつたら」という「妄想」から始まった。その1人がそのことを親しかつた他の県の2人の連携実務者に話したところ賛同を得て、一緒に開催に向けてのたたき台となる案をつくり、さらに他県の連携実務者に声を掛けていって輪を広げ、最終的に7県合同の会を作り上げたのである。

なぜそのように県を越えて各連携実務者の賛同が得られたかと言えば、他の人も同様のことを考えていたからに他ならない。いわば地域全体のニーズに合致していたわけである。こうした地域に共通するニーズに合致していれば必ずや事は進む。東北6県、新潟を加えた7県は思ひの外近くにありのである。

かつて、新潟を含む東北7県に本社または活動拠点を持つ主要企業・団体でつくる東北経済連合会が「ほくと七星」構想を掲げたことがあつた。基本目標として「ゆとりと美しさに満ち、自立する東北広域連携圏の

形成」を掲げ、「自立と連携を支える社会資本の整備」、「地域主権による分権社会の構築」、「行政の枠組みを超えた広域連携」を謳い、7県の自治体間の連携を進めると共に、「東北7県連携推進会議」を立ち上げて連携推進のエンジンとすることなどが謳われていた。しかしその後、残念ながらこの東北7県推進会議が立ち上がった当初の役割を果たした痕跡はない。

機能しない会議をつくるよりも、各分野で7県連携の実績を作り上げていき、それをエンジンにしてさらに7県の連携を進めていくというのが、実効性のある連携のあり方なのではないかと思ふ。

列藩同盟に端を発する「奥羽越」の連携
古来、現在の東北地方は陸奥国と出羽国、一方新潟は越後国として、越前、越中などと共に北陸道を構成していた。この東北と新潟が一体となつて地域の課題解決に当たろうとした最初の例は、恐らく戊辰戦争における奥羽越列藩同盟である。当初、会津藩、庄内藩の朝敵赦免の嘆願という「課題解決」を目的として結んだ同盟であつたが、それが新政府側に拒絶された後は、輪王寺宮・北白川宮能久親王を盟主と置き、新たな政権(北部政権)の樹立を目的とした軍事同盟へと変化した。結果は敗戦

であつたが、一時はアメリカ公使が本国に、「今、日本には二人の帝がいる。現在、北方政権のほうが優勢である」と伝えるほどの存在を示している。

東北と新潟の7県が一体となつた取り組みに関する少し前の事例としては、産学官の連携でこの地域を独創的な科学技術開発の拠点にしようとした1987年に立ち上がった「東北イノベーション・コスモス構想」や、東北地域が新たな事業活動を創出して日本経済をリードする活力ある地域経済社会となることを目指してやはり産学官が連携して1995年に始めた「東北ベンチャーランド運動」を挙げることができる。

2007年に設立された東北観光推進機構も東北6県と新潟の7県をそのエリアとしている。奥羽越列藩同盟以来今日に至るまで、この7県で一致協力して取り組んだことが何度かあつたわけである。

そしてこうした取り組みは、これからのことについても言える。何かの課題を解決しようとする際に、当事者だけでなく、周囲を見渡してより広く仲間を求め、情報を交換する。その中には、直接の当事者には思ひもよらなかつたヒントや解決の糸口が得られるかもしれない。また、同様の取り組みをする者同士がコラボレートすることで、それらの取り組みがさらに充実したものとなることもあるかもしれない。そうした受け皿として東北6県ないし新潟を加えた7県の枠組みは、ちよつとよい広がりを持つて有効に機能するのではないだろうか。

自治体同士がすぐに連携しようという雰囲気ではないのだとしても、その姿勢を我々まで踏襲する必要など全くない。むしろ、我々の方で同じ地域同士として連携を深め、共同して何かを成し得る体験を重ね、その積み重ねを基に自治体に対して連携を促す、という方が、意外に東北圏域の連携実現のための近道なのではないかと思ふのである。

東北7県医療連携実務者協議会
は東北各地から約200名が参加して盛り上がった(写真は懇親会)



執筆者紹介

大友浩平

(おおともこうへい)
奥州仙臺の住人。普段は出版社に勤務。東北の人と自然と文化が大好き。趣味は自転車と歌と旅。

「東北ブログ」
http://blog.livedoor.jp/anagmasi/



Facebook
https://www.facebook.com/kouhei.ootomo

連載
むかしばなし

芭蕉のむかしばなし

第十八話
語る高衡



奥羽越後現像氏紹介

一九七〇年山形県鶴岡市生。札幌、東京を経て、仙台に移住。市内のケルト音楽サークルに所属し、あちこち出演し演奏する。フィドル(ヴァイオリン)担当。

阿古耶という娘が、自分に取り憑き、この身体を守護している。確かに、それを感ずる事ができる。馬を降りた時も、若は背中の痛みを感じなくなっていた。「阿古耶さんも、太郎さんも、ずっと昔の人なのですね。」

「高衡は若とそう年の変わらない少年である。病の為にほとんど学校に行けなくなり、同年代の男子と話す機会もすつかり少なくなっていた若だが、八百年といえどもこちらも高衡とは同様の年月の隔たりがあるので話題が合うとも思えない。言葉も所謂東北弁ではあるがかなり昭和のそれとは違う部分がありやと大まかな意味がわかる。ぐらいなのだ。」

「この名取の地に、星が落ちたのです。奥羽中から、人が集まってきました。すると、物凄く高い樹が、天高く生えていたのです。あの、烏丸森から。」

「私に話したいものか。信じていい話なものか。私の時代には、太白山と呼ばれているの。」

「そう、そのたいはくさん、から。もう、天辺が見えないくらい、高かったそうです。それで、天界への使者が選ばれて、登っていく事になったのです。それが名取太郎、つまり大河太郎でした。」

「名取・太郎。」

「登っていった太郎は、何と三百年も、降りてこなかったそうです。普通、死んだと思えますが、そうではなかった。そのうち朝廷の命令で樹は切り倒されてしまい、太郎は星が落ちてきた時のように、落下しました。人間の世界の外へ行った太郎は、もはや化物となつて、怒り狂い暴れ回つたそうです。」

「それは、大変ですね。」

「はい。それで、樹を切り倒した張本人が、綾糟という当時のこの地の蝦夷の長で、これが名取太郎を見事退治したそうです。」

「あつ、退治されたんですか。」

「ええ、といつても殺された訳ではなくて、出羽の方へ一日退散したようです。最上の地に千歳の名を冠す山あり、ここに籠もっている時、阿古耶に出会ったというのです。」

若の胸が不思議に高鳴る。見も知らぬ古代の女が、自分の中にいる。今、まさにその彼女の物語を聞いて

「阿古耶は、藤原の巫女です。つまり、某らと根は同族。もと中臣で、神と人の仲立ちをする人物を輩出してきた家系です。」

「なぜ、その方が出羽に？」

「お父上が出羽守として赴任したから、と言われますが、実は姫自身が朝廷より特別な任務を授かっていたという話です。」

「何ですか。女王って？」

「若は後ろへ引いた。さすがに、それは父の昔語りにも出てこない。やはり、若どの時代には伝わっておらぬか。」

「昔、昔・奥羽には、女王の国がござった。女王は不死で、朝廷の脅威であり続けたのです。」

「まあ、この辺にしようか。」

「あ、待つて下さい、あまりにも話が大きすぎです。若は少年の手甲を掴んで引き留めた。」

「しかし私は語り部の娘です。しかと聞いておく責務があります。」

「そうですか。でもまず、皆で夕餉といきましょう。」

「お父上がどうも、今、まさ

にその彼女の物語を聞いて

「お父上が出羽守として赴任したから、と言われますが、実は姫自身が朝廷より特別な任務を授かっていたという話です。」

「何ですか。女王って？」

「若は後ろへ引いた。さすがに、それは父の昔語りにも出てこない。やはり、若どの時代には伝わっておらぬか。」

「まあ、この辺にしようか。」

「あ、待つて下さい、あまりにも話が大きすぎです。若は少年の手甲を掴んで引き留めた。」

「しかし私は語り部の娘です。しかと聞いておく責務があります。」

「そうですか。でもまず、皆で夕餉といきましょう。」

「お父上がどうも、今、まさ

シリーズ 遠野の自然 「遠野の初秋」 遠野 1000 景より



稲刈り

夕暮れどき
夕暮れどきというのとは、
てもさびしいものである。
明るい光あふれる時間か
ら、光が消える時間へ移動
する境目であるとともに、

夕暮れどき

活発に活動する昼間の時間
から、活動を抑制し、ある
いは静止する夜の時間への
移動の境界線でもある。
筆者は幼少の頃から、夕
暮れどきが苦手であった。
活発に遊び歩くことができ
なくなる時間であり、それ
は遊びを中断しての帰宅の
時間であったからである。
そのため、大人になった
今でも夕暮れどきになると
いつも落ち着かなくなり、
飲みにかけて「魔の時」
をやり過ごしたくなる。

晩秋はいつも寂しい

特に晩秋の夕暮れどきは
つとにさびしく感じる。
にぎやかな盛夏の時を過
ぎ、実りの秋をくぐり抜け
る。その時点を境に晴れが
まし行事も終わり、かす
かな足音だが、確実に大き
くなって近づいてくる冬の
足音を聞く季節となる。
その前触れが紅葉であり、
紅葉した葉が散り始めると、
もう冬を迎える心構えをし
なければならぬ。
凍えるほど寒い冬、雪も
降る冬。実際に冬が到来す
ればあきらめもするが、晩
秋とは、到来する冬の厳し
さを想像して身も心も身構
え、緊張する季節である。
また、この季節は物悲し
く、遠野人にとっては、冬
を迎える準備風景も何処か
寂しいことである。

自分の年齢を重ねる

筆者も還暦を過ぎて二年
目となった。こうした年齢
になると晩秋は特別の意味
を帯びてくる。
言わば、自分の年齢的な
状況と晩秋の光景が重なり
合ってくる奇妙な感覚に陥
ることがある。
落日、紅葉、枯れ落ち葉
などは、まさに老境の入口
に立った自分のことではな
いかと思ってしまう。
しかし、まだ枯れ切って
しまうには時間がある。無
駄なエネルギーを放出しな
いで、一点集中で燃焼させ
ることが出来ると思わなけ
れば、人生にも冬が到来し
てしまう。それに種子とな
り、次世代に引き継ぐこと
も考えなければならぬ。



六角牛山夕景



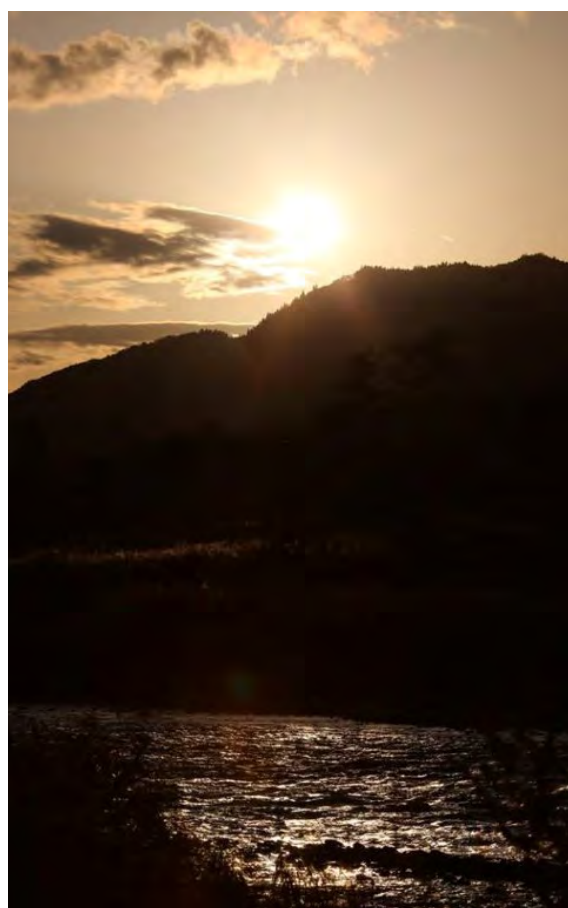
夕暮れの池



お通り



ススキ



落陽



ツタの紅葉

仙台「食の探訪記二〇一四」 〜そして宮城の地酒考

佐藤紀彦

仙台を観光で訪れた方も

多いと思うが、楽しみは何
と言つても、食材王国・宮
城の旬の料理を目で楽しみ
舌で味わうことであらう。

某星取り料理ガイド本に掲
載されるような、敷居の高
一流店は生憎存じあげな
いが、食べ歩きを趣味とす
る中で私が見つけた、庶民
的な料金でも小さな感動が
見つけられる料理店を、こ
こでは是非紹介したいと思
う。結果として、冷酒が合う店
ばかり集まってしまうた
が、そこは筆者の個人的趣
向ということと勘弁願いた
い(それだけ宮城の地酒は

美味しいのです!)。先ずは、東北随一の繁華
街「国分町」の裏手にある
『都留野』。この売りは何
と言っても地元名物の牛タ
ンである。牛タンに関して
は、発祥の地「太助」や急
速にチェーン店網を拡大し
ている『利久』等が観光客
に人気があり、これらの店
のお陰で仙台牛タンが全国
ブランドへと押し上った事
実は否定しないが、各店を
食べ比べる中で、私が個人
的に、王国・仙台の地で、
頂点に君臨する牛タンとし
て賛辞を惜しまないのがこ
の『都留野』の一品である。

まず炭火で炙った、仙台牛
タンお馴染みの「焼き」か
らして、厚切肉がプリプリ
とした食感で、もう堪りま
せん。そして、この店の極
め付けは、やはり牛タンの
「たたき」と「刺身」。生の
牛タンはマグロの大トロよ
りくどい感じがせず、また
馬刺しよりも口解け感が強
い。そんな不思議な食感
を舌先で味わいつつ、二杯
目、三杯目からが味わいを
増すと云う。食中酒とい
うジャンルの地酒、「伯楽
星」の冷でキューッと締め
れば、日頃の苦勞も忘れる
至福のひとつ時が、きつとあ

美
味
し
い
の
す
で
す
!



なたを包み込むはずである
この『都留野』、以前は知
る人ぞ知る隠れた名店であ
ったが、グルメサイト全盛
の昨今、ふらっと立ち寄っ
ても「すみません、今日は
満席なんです」と入店を
断られるようになり、近く
で遠い存在となつてしまっ
たことが、つくづく悔やま
れる。

続いて紹介するのは、日
本酒好きの地元民には超有
名店でもある『一心』。店
の入口には「宮城県産酒は
宮城県民の宝です」と郷土
愛剥き出しの標語が掲げら
れているが、それは地酒と
酒の肴である地元産食材に
自信があることの裏返しと
して温かく受け止めて頂き
たい。店の中は実に落ち着
いた良い雰囲気である。こ
の店で、席に着くと先ず出
てくるのが、付き出し刺身

三種盛(千五百円也)。在
り来りのようにも見えるが
これを口に運んだ瞬間、訪
れた客は、この店が一品の
料理に、どれだけ心血を注
いでいるかを理解するであ
らう。「名店」の評判は伊
達では無い。季節物の夏の
ガゼウニや冬の吉次焼・白
子料理は、文句なしに絶品
である。また、珍味として
知られる莫久来(ぼくらい)
：「ぼや」とナマコの内臓
である「このわた」の塩
辛)も、半解凍のまま出し
てくれるため、口の中でじ
ゅわっと旨みが広がる仕掛
けとなつており、「日高見」
「宮寒梅」等の地酒とも実
に良く合う。酒好きを泣か
せること、この上ない。な
お、この『一心』には、「逸
品銘酒」という天上のマジ
カル・ワールドが存在し、
般若湯に痺れた脳髓を、高
嶺(高値?)の花咲き誇る
桃源郷へと誘う。磨き込ま
れた、破格の一品は、注文
したことを決して後悔させ
ないが、『一心』のラスポ
ス、「伯楽星」を生みだした
新澤醸造店の最高峰「残
響」(四合瓶四万円也)だ

けは、どんなに理性が薄れ
ても、私は、頼める勇気を
未だ持ち合わせていない。
そして最後に案内するの
が、昭和の佇まいを残す横
丁街(文化横丁)の隅で、
ひっそりと営業を続ける
『源氏』。細い路地を曲がっ
て、行き着いたその店の雰
囲気は、まさに戦後の面影
を、そこだけ切り取って運
んできたかのような異空間
である。創業一九五〇年で、
カウンターしかない店構え
からは、歴史の重みだけで
はなく、そこはかとない温
かさが滲み出ており、白割
烹着姿できびきび動く女将
さんがその風景に浴け込ん
でいる。塵一つ無い清潔感
そしてBGMの無い静寂の
世界。この店の暖簾を初め
て潜った客は、当初は、巷
間の喧騒とのギャップに驚
き、戸惑うが、創業時から
守り抜いた糠床より取り出
した、芳しき糠漬けをポリ
ポリ齧りながら、飲み口
軽やかな地酒「純米浦霞」
を啜るうちに、日本酒だけ
ではなく、この店にたゆた
う豊かな時の流れにも酔う
はずである。

そして、今日もまた、仙
台の夜は静かに更けてゆく
。 * * * * *
地酒が旨いのは、その土
地ならではの肴に合うよう
、地元の蔵が精魂傾け、原材
料・酵母・製法等にこだわ
り、酒造りを追究している
からである。しかし、宮
城を含む被災地の酒蔵に関
して言えば、その探究心は、
東日本大震災以降、一段高
い次元へと進んでいるので
はないだろうか。

私に日本酒の飲み方を教
えてくれる師匠は、国分町
の最奥部、本樽荘という木
賃アパートの1階に店を構
える『酔亭よっちゃん』の
親方である。私よりも一回
りは若いこの親方、最近で
は一緒に働く奥さんの指導
故か、だいぶ丸くはなつた
が、以前は、一杯目から「伯
楽星」を頼もうものなら、
まず一言、口を挟まずには
おれない性質の人であつ
た。その親方曰く、今の季
節、地酒と肴で最高の組合
せは、名取市閑上の地酒「宝
船浪の音(ほうせん・なみ
のおと)」と、炊いた御飯
の上に鮭とイクラをまぶし
た郷土料理「はらこ飯」で
はないかと。でも、閑上の
旧市街地って、あの津波被
害で、造り酒屋が残るどこ
るか、街一つ壊滅している
のでは...?といぶかる私に、
親方は「浪の音」の蔵元で
ある佐々木酒造店は、名取
市下余田の復興工業団地内
にある仮設工場で、震災後
に酒造りを再開していたこ
とを教えてくれた。「若い
後継者が、宮城県産業技術
センターってこの先生の
言うことを素直に聞いて造
っているから、結果的に旨

い酒ができたってことなの
かもな」と親方は言う。し
かし、後に佐々木酒造店の
ことを調べたところ、孟夏
が続く中で、仮設工場で暑
さ対策を行いつつながら、全
国の酒造会社から寄贈を受け
た機械を用いて酒造りを行
うことが、どれだけ大変な
ことなのか分かった。震災
を機に廃業した蔵元もあ
る中で、資金面にも不安を
抱えながら、再出発を果た
すために、若き後継者は、
自分の中の酒造りへの「情
熱」と改めて向き合う必要
もあつただろう。「それじ
や、その旬の組合せ、出し
て貰えますか」と頼む私に、
親方がつれなく答える。「こ
めんない、今『浪の音』
切らしてまして...」。悲し
い哉、私の師匠は食えない
人でもある。

かの震災で、宮城の酒造
所は、どこであつても、大
なり小なりの被害を受けて
いる。気仙沼の「蒼天伝男
山本店」、石巻の「日高見
(平孝酒造)」「墨廻江(墨
廻江酒造)」は言うに及ば

ず、内陸側でも仕込み・貯
蔵タンクの倒壊や、建物・
機械の破損により生産手段
を奪われた蔵元があり、何
百・何千本単位で商品の酒
が失われたとも聞く。しか
し、その蔵元達が、最近に
なつて極上の地酒を次々と
世に送り出していることは、
地元民としては嬉しい限り
である。この原稿を書き始
めた十月下旬にも、出品数
世界一を誇る市販日本酒の
利き酒大会「サケ・コンペ
ティション二〇一四」の場
で、加美町の若き蔵元・山
和酒造店の「山和」が純米
大吟醸部門で全国一位とな
るグランプリを受賞したほ
か、新澤醸造店「伯楽星」は、
純米酒の部門で会津の「寫
樂」に続き、第2位の評価
を受けたというニュースが
飛び込んできた。実直な人
間性と厳しい自然が織りな
す地酒の多様性は、東北が
誇る伝統文化の一つであり、
人の生活を豊かにする源で
もある。新たな担い手の下
で、震災以降、日進月歩の
進化を遂げる宮城の地酒を、
あなたもぜひ御賞味あれ!



『都留野』牛タンのたたき



『一心』逸品銘酒の「伯楽星
純米大吟醸 29%磨き」と付き出
し



『一心』莫久来



静寂が支配する『源氏』の店内



国分町の隠れ家的存在『酔亭よっ
ちゃん』

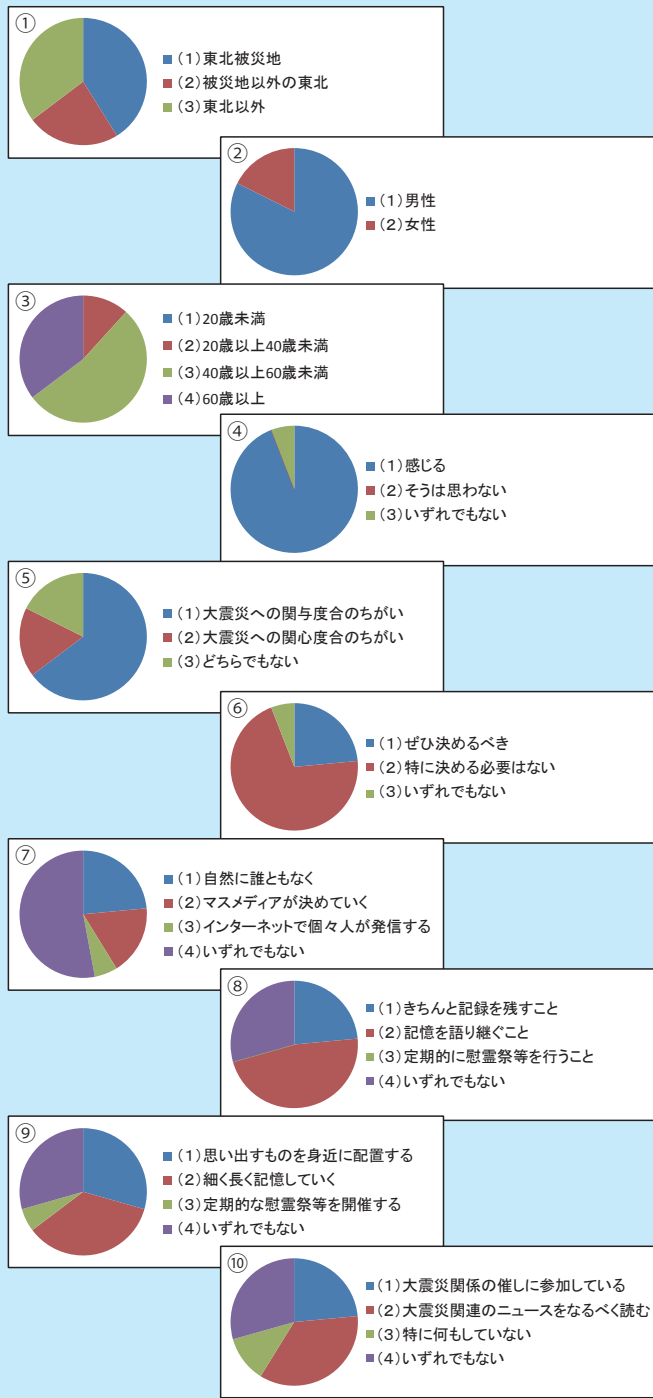


『よっちゃん』親方から見せて貰
った新澤醸造店からの感謝品(箱の
み)。

第29号 ネットアンケート集計結果

【「大震災を忘れない」ことについて考える】

NO.	質問と選択肢	回答数
①	住所	
	(1) 東北被災地	7
	(2) 被災地以外の東北	4
②	性別	
	(1) 男性	14
	(2) 女性	3
③	年齢	
	(1) 20歳未満	0
	(2) 20歳以上40歳未満	2
	(3) 40歳以上60歳未満	9
④	「大震災を忘れない」ことの意味づけ	
	(1) 感じる	16
	(2) そうは思わない	0
	(3) いずれでもない	1
⑤	マチマチだとしたらその理由は?	
	(1) 大震災への関与度合のちがいがい	11
	(2) 大震災への関心度合のちがいがい	3
⑥	「大震災を忘れない」ということの定義	
	(1) ぜひ決めるべき	4
	(2) 特に決める必要はない	12
⑦	定義は誰が決めるか?	
	(1) 自然に誰ともなく	4
	(2) マスメディアが決めていく	3
	(3) インターネットで個人が発信する	1
⑧	「大震災を忘れない」とはどういうことか?	
	(1) きちんと記録を残すこと	4
	(2) 記憶を語り継ぐこと	8
	(3) 定期的に慰霊祭等を行うこと	0
⑨	「大震災を忘れない」ための工夫	
	(1) 思い出すものを身近に配置する	5
	(2) 細く長く記憶していく	6
	(3) 定期的な慰霊祭等を開催する	1
⑩	「大震災を忘れない」ためのあなたの心がけ	
	(1) 大震災関係の催しに参加している	4
	(2) 大震災関連のニュースをなるべく読む	6
	(3) 特に何もしていない	2
⑪	「大震災を忘れない」ことについて考える	
	(1) 感じる	16
	(2) そうは思わない	0
	(3) いずれでもない	1



今回は「大震災を忘れない」ことについて考える【】でした。震災を忘れないと言いますが、内容は人によって違うのに同じ言葉を使うことにひっかかりがあり、このアンケートとなりました。回答者数は17名。「大震災を忘れない」ことの意味づけが人によってマチマチだと感じるか?」は圧倒的に約94%が「感じる」でした。「マチマチだとしたらその理由は?」は、「大震災への関与度合のちがいがい」が約64.7%であり、「関心度合のちがいがい」はわずかったです。「大震災を忘れない」ということの定義を決めるべきか?」は、「特に決める必要はない」が約70.6%で、「ぜひ決めるべき」を大きく引き離しました。「定義は誰が決めるか?」は約52.9%が「誰でもない」で設問がダメで、「自然に誰ともなく」と「マスメディアが決めていく」が2割程度でした。「大震災を忘れない」とはどういうことか?」は「記憶を語り継ぐこと」が約47.1%、「きちんと記録を残すこと」約23.5%と続きま

す。「大震災を忘れない」ための工夫」は「細く長く記憶」が約35.3%、「思い出すものを身近に配置」が約29.4%。「大震災を忘れない」ための心がけ」は「大震災関連のニュースをなるべく読む」が約35.3%、「大震災関係の催しに参加している」が約23.5%でした。

最近、いろんなことがありました。まずは宮城県石巻の大室南部神楽のみなさんにお会いできたこと。そして奇跡の復活を遂げた神楽を渋谷で拝見させていただきました。心の交流といいますが、ほんとうに会えてよかったです。しみじみ思いました。

それから、岩手の大槌のことを考えると胸が痛みます。三年半も経過すると、被災地経済以上に被災者の家計がより厳しくなってきたの分かります。復興支援はまさにこれからの場合ではあります。ここから本格支援の開始だと言いたいです。

奥松島の防潮堤は憤りを感じました。引き返してその姿を何度も確認したほどです。中途半端な高さの防潮堤がいったい何の役に立つというのでしょうか。むしろ観光事業を壊滅状態に追い込んでいく障害にもなりかねません。

あまりの腹立ちに耐えかねていたところ、ふとつい今しがた見学したばかりの里浜縄文遺跡の住人たちが笑っているように感じて、憤るのを止めました。

縄文人の方が多くの大震災とそこからの復活を体験しているはず。過去に学ぶということを実践に考えるべきときです。

編集後記

最近、いろんなことがありました。まずは宮城県石巻の大室南部神楽のみなさんにお会いできたこと。そして奇跡の復活を遂げた神楽を渋谷で拝見させていただきました。心の交流といいますが、ほんとうに会えてよかったです。しみじみ思いました。

「東北を世界に！」プロジェクト募集

- プロジェクト募集要領
- ① 東北の復興、活性化、再興を目的としたプロジェクト企画であれば、何でも可
- ② 応募資格は特に定めず、被災地、被災地以外の居住も問わず、国籍・年齢・性別を問わず
- ③ 企画書のようなものがあれば可---形式自由(プロジェクト名、プロジェクト期間、目的、どうやって実現するかの手段、仲間などを明記していただきたいと思ひます)
- ④ 〆切はとくに設けません

「東北を世界に！」プロジェクト募集

- 連絡先/企画提出先
(郵送) 〒207-0005 東京都東大和市高木3-315-1 ホームタウン宮前2-2 電子タブloid新聞【東北復興】宛
(メール) yumuyu@wj8.so-net.ne.jp
- ご提案いただいた企画については、当新聞で責任をもって検討させていただいた上で、企画開始に向けてのしかるべき方法・手段をご提案するなり、企画実現のための仲間を募ってまいりたいと考えております。また、当新聞でご紹介させていただきたいと思ひます。(氏名公表か非公表かはご相談)
- たくさんのご提案をお待ちしています